



.....

**尻屋崎灯台からはじまる
“海と地球の記憶”に出会う旅**

～暖流と寒流が交わる本州最涯での地
海と灯台のまちの物語～

.....

レンガ造りとしては日本一高い灯台「尻屋崎灯台」。白く美しいフォルムの灯台はまさに“SNS映え”スポットです。実際に訪れることで、灯台そのものはもちろん、灯台の建つ大地に“海と地球の記憶”を刻んだ尻屋崎ジオサイトと尻屋集落についての興味深い「物語」を感じることができます！



灯台を形成するレンガ

尻屋崎灯台 ① の成り立ち (2)

尻屋崎灯台は、レンガ造りとしては日本一高い灯台でもあり、灯台を理解する上でレンガは重要な要素です。イギリスの技師プラントンの設計による尻屋崎灯台は、強固な“閃緑岩”の地盤に建てられています。固い地盤に建てる上で、秋から冬に吹き付ける強風に耐え、遠浅の津軽海峡を航行する船舶へ遠方から確認できる灯りを届ける高さを維持しながら、頑丈さと耐震性を考慮して、灯台の建設にはレンガによる二重構造が採用されました。レンガは長辺（長手）だけが見える段と、短辺（小口）だけが見える段が交互に積み重ねられています。この手法は『イギリス積み』と呼ばれる手法で、その積み方は灯台を訪れることで実際に目にすることができます。

当時、まだ建材としては珍しかったレンガですが、幕末にこの地へ移り住んだ元会津藩士＝「斗南藩」も製造に関わっていた可能性が、近年の調査から明らかになりつつあり、灯台の建築を明治政府に請願したのも、この地の再興を願った斗南藩士であったとされ、その存在は、尻屋崎灯台の歴史を紐解く上で欠かせません。ちなみに尻屋崎には斗南藩所縁の「感恩碑 ③」も太平洋側のかつて海を望めた地に建てられ、訪れることで想いを馳せられます。

海を、そして寒立馬を守る漁師の森

現在は青森県の天然記念物としてその生息地とともに保護されている寒立馬。春～秋は尻屋崎周辺で放牧されますが、冬はここから漁港寄りへ南下した「アタカ」と呼ばれる越冬放牧地で過ごします。この地で馬を強風や悪天候から守るのが周辺の森。その大部分は地元漁師が植えた「砂防林 ⑥」でもあります。

尻屋崎は、冬の北西風が崖から削った砂で覆われています。灯台周辺の放牧地は、その砂が堆積した砂丘になっています。こうした砂がそのまま太平洋の漁場へ流れ込まないよう、地元の漁師は砂防林となる黒松を植林したとされています。海を守るために、漁師が大地に植林をする。最初の植林が行われたのは1911年(明治44年)のことでした。



アワビ

ヒラメ

**灯台周辺は、
海の歴史を感じる地形の宝庫**

この尻屋崎灯台、位置的には下北ジオパークを形成する「尻屋崎ジオサイト ④」の中にあり、灯台へ登ると山々が連なる津軽海峡側から付加体が隆起している太平洋側まで、ジオパークならではの地形の変化を一望することができ、下北ジオパークを深く理解する入口にもなるのです。灯台周辺の大地は約2億4000万年前から海底に堆積したサンゴなどが岩石に変化し、長い年月を経て海洋プレート動きにより大陸プレートに押し付けられ、地表へ運ばれてきたのです。

灯台周辺はそんな海の歴史を刻んだ地質「付加体 ④」の絶好の観察ポイント。付加体の中には貝やプランクトンの化石が存在し、海と大陸の岩石が変成・混合した「メランジ」も観察できます。そして約1億2000万年前に付加体の大地に入り込んできた強固な閃緑岩が灯台を支えています。灯台は海の歴史が積み重ねられた大地の上に建っています。

また周辺は、約12万年前の氷期に波の浸食で形成された階段状の地形「海成段丘」が広がります。灯台周辺を含む段丘面は現在、海を見渡す放牧地となり「寒立馬」が草を食みます。



尻屋崎ジオサイト



寒立馬

**海と人々を、
灯台と人々を繋いだ寒立馬 ⑤**

尻屋崎ジオサイトならではの良質な放牧地では、中世のころから良馬が育てられ、江戸時代以前から南部藩が馬産を振興し、地元では漁業と共に軍用馬、農用馬を育てていたとされます。そんな歴史や人々の生活を反映して、現在この地で育てられている寒立馬は、厳しい冬の環境にも順応し、競走馬などとは異なる胴長短足の野趣あふれる特徴を有します。

農作業や運搬に機械が導入されるまで寒立馬は、野草地から砂浜まで柔らかくデコボコした道を往来できる蹄と脚力を活かし、海産物を背に乗せて海から集落へ運んでいたそうです。馬ソリも引ける寒立馬は冬の荷運びにも重宝し、地元の古老の話では尻屋崎灯台へも灯台守の生活物資を運んでいたそうで、海、そして灯台とも深くつながる存在なのです。



砂防林

灯台が漁師を見守り、漁師が守る海の恵み

尻屋崎周辺の海は、海底中も段丘的な形状で遠浅の漁場を形成。そして津軽海峡と太平洋がぶつかり合う海からは多くの恵みがもたらされます。なかでも「アワビ ⑦」は非常に良質で身のつまったものが獲れます。また尻屋産の干しアワビは古くから最高級の食材として認知されていたようで、中世日本では唯一のアワビ主体貝塚とされる国史跡「浜尻貝塚」がそれを物語っています。

また尻屋崎を含む東通村全体は新鮮な地魚の好漁場でもあり、最近では東通村産の「天然ヒラメ」と地場産食材を用いた新・ご当地グルメ「東通天然ヒラメ刺身重」を開発。尻屋崎灯台から漁場を臨み、ジオパークや寒立馬の特徴や歴史、そしてそれぞれが守り守られ結びついていることを感じた上で味わうと、尻屋崎の海の奥深さを心と舌で感じられるのでは…?

尻屋崎灯台は、尻屋崎の“ジオパーク”ならではの風土、そこで海と生きる人々と自然の循環を理解する入口としても訪れる人々を導き続けるのです。

尻屋崎灯台 ① の成り立ち (1)

約2万年前の最終氷期、大陸と日本列島が陸続きになっても、水深の深い津軽海峡は北海道と本州を隔てていました。この海峡の東端、尻屋崎沖は暖流と寒流が流れ込むことで豊かな漁場が育まれる一方で、潮の流れが変わりやすい海でした。さらに、春から夏にかけては北東から吹く「ヤマセ」が濃霧を発生させ、秋から吹き始める西風は強さを増し、冬には空気の塊がぶつかってくるように尻屋崎に吹きつけます。

そのような地理的な特徴を持つ尻屋崎沖はかつては「難破岬」とも呼ばれ、航行を避ける船も多く、尻屋の漁師たちも金毘羅宮小祠と岸島大明神小祠 ② を建立し、航海と海の安全の神様として大切に信仰してきました。やがて明治期に世界各国との貿易が盛んになり、船舶の安全を守るために1876年(明治9年)に尻屋崎灯台が建設されます。

尻屋崎灯台には濃霧で灯りが船舶に届かない状況への対策として、1877年(明治10年)に、灯台としては日本で初めて“霧鐘”が設置され、濃霧時は鐘の音で灯台の位置を伝えていました。さらに1879年(明治12年)、霧鐘は“霧笛”へ置き換えられます。霧笛の設置も尻屋崎灯台が日本の灯台では初めてで、設置日の12月20日は“霧笛記念日”に制定されました。また尻屋崎灯台で使われた霧鐘は現在、犬伏崎灯台(千葉県)に展示されています。



- 灯台からはじまる物語は裏面に続きます!
- ①～⑦は中面マップの位置を示します。

尻屋崎灯台について

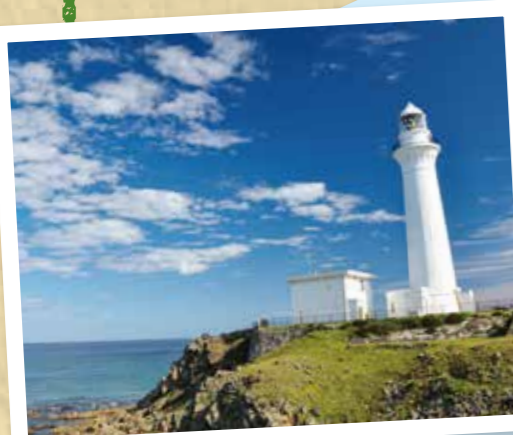
- 参観
4月下旬～4月30日 9:00～15:00
5月1日～11月下旬 9:00～16:00
- 参観寄付金
中学生以上300円
- 位置
北緯 41度25分49秒
東経 141度27分44秒
- 塗色・構造
白色、塔形(レンガ造)
- 灯質
単せん白光、毎10秒に1せん光
- 光度
530,000カンデラ
- 光達距離
18.5海里(約34km)
- 明弧
52度から3度
- 高さ
地上から構造物の頂部まで33メートル
平均水面上から灯火まで47メートル
地上から灯火まで28メートル
- 点灯年月日
1876年(明治9年)10月20日



地球の記憶を感じに、海の魅力を感じに、灯台へ行こう!

海と海が出会う灯台から、地球の記憶を巡る旅へ

1 尻屋崎灯台



全国に16しかない「参観灯台」。
レンガ造りでは日本一高い灯台。
上まで登って360度見渡してみよう！

全国に16基ある展望台へ登れる「参観灯台」の一つ。本州最北東端、海拔約45mにせり出した展望台はまるで360°の空中回廊。海側は北海道を望み、左の暖流、右の寒流が交わる海の雄大さと、陸側は下北西部の恐山山地から、その東側の田名部平野へ緩やかに広がる下北ジオパークを体感できます。灯台内ではレンガの構造やフレネルレンズを見ることができ、敷地内では閃緑岩に触られます。

●参観：4月下旬～4月30日 9:00～15:00 / 5月1日～11月下旬 9:00～16:00
※参観寄付金・中学生以上300円 ※悪天候などによる中止の場合あり
●灯台へのアクセス：【公共交通】JR大湊線下北駅⇒むつバスターミナル(下北交通バス尻屋崎線)⇒尻屋崎口下車(約40分)⇒徒歩約30分
※バスは5月1日～10月30日、尻屋崎(灯台前)まで運行
【自動車】八戸自動車道八戸IC⇒国道45号、338号、県道6号経由(約2時間30分)



雄大な風景が望める本灯台は「ロマンチックな安らぎを与えてくれる」ことから恋する灯台に認定。東通村では記念のオリジナル婚姻届を発行しています。

3 感恩碑

灯台建設を請願した斗南藩に縁ある秩父宮雅仁親王、勢津子妃両殿下が1936(昭和11)年に尻屋地区を訪問しています。尻屋の人々は両殿下の訪問に感謝し、1938(昭和13)年、当時海を見渡す高台だった躑躅ヶ丘に感恩碑を建立しました。

●灯台からのアクセス：尻屋漁港方面へ車で4分。途中から内陸側へ徒歩5分



7 海産物 (アワビ・ヒラメなど)



灯台周辺の遠浅な海底は「コンブ」の漁場として知られますが、「アワビ」も古くから獲られ、近接の「浜尻屋貝塚」では14～15世紀に獲られたアワビの貝殻とあわせて、アイヌと縁のある漁具や干しアワビを作り交していた痕跡が確認されています。さらに周辺は地魚の好漁場。最近「天然ヒラメ」と地場産食材を用いた「東通天然ヒラメ刺身重」が評判です。

●灯台からのアクセス：浜尻屋貝塚…尻屋漁港方面へ車で約3分。道路沿いの「浜尻屋貝塚」の標柱がある丘へ
※東通天然ヒラメ刺身重は、東通ヒラメ料理推進協議会(0175-27-2111)へ事前確認ください。



ジオパークとは？

「人々の暮らしと自然や大地とのつながり」を学び、楽しめる場所です。地域の名所や名物が生まれた背景には、地域特有の地形や気候、海流が関係しているはず。その経緯を知ること、地域をまるごと好きになれます。※観光のご相談は下記へ

下北ジオパークガイド
(しもきたTABIあしすと)

0175-31-1270



「海と灯台プロジェクト」は、壮大なスケール感をもって広がる海を見渡す「灯台」を中心に地域の海の記憶を掘り起こし、新しい海洋体験を創造していくプロジェクトです。本冊子は同プロジェクトの2020年度調査研究事業に基づき制作されました。

海と灯台プロジェクト



<https://toudai.uminohi.jp/>



暖流
(津軽海峡)

寒流
(太平洋)

4 尻屋崎ジオサイト



灯台周辺はむき出しの閃緑岩、海岸線には約2億4千万年前の海山に生息した二枚貝の化石を含む石灰岩や深海の底に積もったチャートを観察できる。ダイナミックな山体の隆起や海流の潮目も見ることができ、大地と海の記憶を刻んだまさに「本州最遅延」の絶景が広がる。

●灯台からのアクセス：まさに灯台がジオサイト！

5 寒立馬

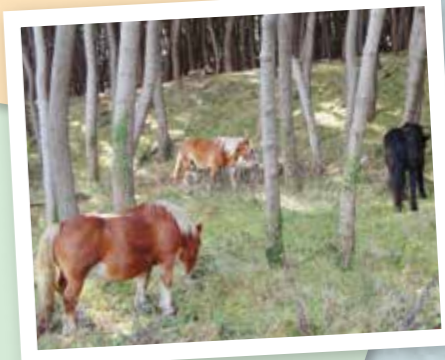
厳冬期にも風雪に耐えて立つ姿から命名され、演歌やミュージックビデオにも登場する寒立馬。4月～11月は灯台周辺で、尻屋崎の冬季閉鎖時期(1月～3月)は砂防林に囲まれた越冬放牧地「アタカ」で、日本在来種の南部馬の血をひく希少馬の雄姿が見られます(12月は移動期間)。

●灯台からのアクセス：尻屋崎内の放牧地で見学可能(悪天候時は周辺の森へ避難する場合あり)
※冬季は「アタカ」へ移動

6 砂防林

灯台周辺に広がる松林は海を守るための砂防林。その下には、海からの風が大地を削ってできた砂が積もる砂丘が広がります。かつて尻屋崎は大森林でしたが明治期に燃料用に森林が伐採され、砂が海に流れ込み漁業に悪影響を与えました。現在広がる松林は、1911(明治44)年以降、尻屋の漁師たちが何度苗木が倒れても日々根気強く植林し続け、長い年月の苦勞を経て復活させた砂防林なのです。

●灯台からのアクセス：灯台より尻屋漁港方面へ道沿いに広がります。



2 金毘羅宮小祠 (写真上) 岸島大明神小祠 (写真下)

尻屋集落の漁師は灯台～漁港の間の小島に岸島大明神、漁港近くに金毘羅宮の小祠を海向きに建て海の安全を祈りました。また尻屋集落を見守る小高い場所には岸島大明神のほか弁天様や龍神様など海と縁のある御神体を合祀した尻屋八幡宮を建立。朱塗りで華やかな建築が印象的で、参道途中から灯台も望めます。

●灯台からのアクセス：岸島大明神小祠…尻屋漁港方面へ車で3分、海沿いに確認可 / 金毘羅宮小祠…尻屋漁港方面へ車で5分 / 尻屋八幡宮…尻屋漁港方面へ車で6分。「水神の郷」(公共施設)駐車場から参道まで徒歩3分

